

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授承認誌第三五二號
昭和二十七年八月廿五日印刷
昭和二十七年九月一日發行

第十八卷 第九號

浄土

九月號



大乘の歩み 眞野正順

阿彌陀經の話 藤井實應

戲曲の時雨 吉田絃二郎

彼岸 松濤誠廉

1952

9

レールと思想

戦争前、圓々華かなりし頃、タクシーの運転手は好んで電車の軌道に乗つて走らせたものだ。うまく乗つて、滑るようになめらかに行くのは、仲々氣持のよいものだつた。それが下手をして、一寸でもはずれると電車道の石疊の凹凸で、いやにガタガタして頗る不愉快なものである。だから、一度うまく軌道にのると、運転手は懸命にハンドルを操つて、車が落ちないようにする。

何でもその通り。軌道に乗ると、ものごとはすべて順調に運ぶ。トントントン調子に進んで行く。だから、人々は成るべく軌道に乗ろうとする。ところが、一度軌道にのると、今度は落ちまい落ちまいと、そのみに心を使つて他を顧みないようになる。しやにむに軌道の上を突つ走つて、四圍の風景を眺める餘裕もなくなつてしまう。こうなつて來ると、形式に走り、殻につつまれて、融通性、包容性がなくなり、他人の意見を無視して、自我を張りとおすようになる。

老人になると、大抵の人は多少意固志になるものであるが、これなど、正しく人生のレールに餘りに長く乗りすぎた結果である。いわば思想の動脈硬化症にかかつたのである。年寄りには止むを得ぬにしても、若いのに、これにかかつている人も仲々多い。また個人丈けでなく、政黨にも、教團にも、これにかかつているものが少くない。

佛教では常に、融通無礙ということをいう。殻を作らぬこと、レールのみに頼らぬことである。教團も、個人も、思想の動脈を常に柔軟にすることが肝要である。(竹中)

目次

大乘の歩み(3)……………眞野正順(1)

阿彌陀經の話(3)……………藤井實應(18)

學寮の篤病人……………須藤隆仙(27)

吉水(3)……………東山未知夫(15)

彼岸……………松濤誠廉(6)

佛教入門……………竹中信常(24)

了阿法師……………八百谷孝保(8)

兄弟雀……………吉田豐子(22)

サーマルの日本人村(3)……………白井憲成(13)

京の時雨(4)……………吉田絃二郎(30)

芝園だより……………會員のページ……………(29)



大乘のあゆみ (三)

第三講

眞野正順

奈良の法隆寺の有名な壁畫の前に立ち、あの端嚴な佛菩

薩の姿を見ておりますと、誰もが、ふと心の底にかすめるものは、あの整つた御姿のどこかに、遠いギリシヤの彫刻を想はせる何物かが、流れてゐる事であります。あの、一分の隙もなく整つた目鼻立ち、引き込まれる様な深い瞳、その堂々たる體軀、この東西はるかに、所を隔てゝ、現はれた二つの代表的藝術に、まごう方なく、共通なものが存してゐます。之はどうした事でありませうか。

(1) 似てゐるのも道理であります。この地球半球の彼方に産出したギリシヤの藝術は、十世紀にわたる長い世代と、遙かなる山河を越へて、流れ／＼て遠くこの極東の島國に到着し、その面影を残してこゝにその花を開いたものなので

あります。

然し夫れにしても、どうしてこの様な事ができたのでしようか。只今のやうに、交通が發達し研究も整つて來た時代なら格別、まだ全てがよく開けていない當時の狀勢に於ては、こんな事は、ほとんど絶望と申してよい事柄であつたのです。その頃、一國の文化が他の國に移るといふのは大變な事でありまして、一つの藝術が、その元のまゝの姿で、遠い距離に眞直ぐ運ばれるなぞと云ふ事は、絶対にあり得ません。まづ隣國に傳へられて、そこの民族の中に根を下して、其處の人々の手に依つてゆはゆる模造品が造られる。それが更に、その向ふの國に移つて行つて、その模造品のまた模造品がつくられる。この様な事をゆつ／＼くりく

り返しながら、順送りにそろ／＼と傳はつてゆく。それ故その歩みのテンポは恐ろしくのろく、大變な年月がかかるばかりではない。そんな事をしてゐる内に最初の藝術はだん／＼姿をかへて、終りには、とんでもない形に變つてしまふ。そしてそのあげくの末はどこかの土俗藝術の中に消へて無くなつてしまふのです。夫故、一國の文化が四隣に及ぼす影響は、たとへて云へば暗の中の蠟燭の光のやうなものとして申しましょうか。近い周りは強く輝やいて、本來の姿を維持してはいますが、だん／＼遠くなり、その勢力がとゞかなくなると、次第に薄らいで、しまひには暗の中に消へてしまふ。ギリシヤの藝術もその例に洩れません。近い所ではその美しい面影を残しておますが遠い末端になると飛んでもないグロテスクな姿となつてゐるのが今でも残つております。

ところが、どうした事かこの法隆寺の壁畫ばかりは、例外であります。遠く遙々とアジア大陸を横切つて、十世紀になん／＼とする長い年月を費して、渡つてきました藝術が、かくも、その本來の高い品格をまさしく維持してゐるばかりでなく、それをも超えて、更に磨きのかゝつた姿で現はれてゐる。全くあり得べからざる稀有の例外でありま

す。是はどうした事でありませうか。そのわけはこうです。

ギリシヤから東へ伸びて來た文化の流がその勢力も弱まつて、まさに消へて無くならうとした時。突然もう一つの大きな新しい人類精神の流が、印度から湧き起り、すさまじい勢ひで、そのギリシヤ文化を乗せて大陸を東につつ切り、遠く極東の島國まで運んできてしまつたのです。

紀元前四世紀、アレキサンダーの率いた希臘の大軍は東へ／＼と進んで、遂にインドの國境を越へてパンジャツプに侵入しました。そして其と共にギリシヤの文化はどつと印度の國內に流れ込みました。然しこれはギリシヤ軍の力にとつてと同様、ギリシヤ文化の勢にとりましても、屆き得る精一杯の遠距離にありまして、こゝらでその力は萎え其の本來の姿は消へてなくなつて仕舞ふのが、自然の運命でありました。所がこゝで、思ひもかけぬ新たなるものに遭遇したのですそれは「大乘佛教」であります。

大乘佛教は、申すまでもなく、佛陀釋尊の偉大なる人格精神を、現實生活の上に擴大して行かうとする、大きな精神運動でありまして、まず、インド内地に於て、バラモン教其他、諸種の思想宗教の長所を、勇敢に自分の中に取り

入れ、鬱然たる大宗教の素地を備へましたが、更に西の方から入つて來たイラン、小アジアの思想要素まで大膽に吸収しました。此時はからずも遭遇したのが、先きに申しましたギリシヤ藝術であります。活潑な生長力をもつた大乘佛教は、すぐこの卓越した藝術に目をつけました。そしてその端嚴無比な人物彫刻を手懸りとして、豫ねて心の中に懷いてゐた、佛陀諸菩薩の理想を、現實の姿に現はしはじめました。これは從來インド諸宗教にかつて無かつた大膽な試みであります。これに見事に成功しますと共に大乘の理想は更に夫に依て發展の歩を進め、こゝに鬱然たる大宗教の形態を完備し、どつと國境を押しきつて、潮の如く東方に向つて流れ出て行きました。インドには宗教の數は多いのでありますが、その中で、國境を越へて溢れ出で、世界人類に貢獻し得た宗教は、外にはありません。たゞこの「大乘佛教」だけであります。そこでギリシヤ藝術もこの偉大なる精神の潮流に載せられて、その本來の氣品ある姿をもつたまゝ勢よく東へ／＼と走つて行つたのであります。

この流は遠くゴビの砂漠を横切つて、も一つの東洋の大國シナ長安に殺到しました。そしてまた／＼く間にそこを席

捲しました。——興味あることには、この時、まず第一に、シナ民族の人々の心をうばつたものは、この端嚴莊麗なる佛菩薩の像であつた相であります。彼等は、その金色まばゆい端麗な佛菩薩のすがたに、目も心も、吸いよせられてゐる内に、どこか、彼等の心の底に久しく眠つていた、崇い精神の世界が目覺まされて來ました。そして、この輝く高貴なる藝術の内面に包まれているところの偉大なる眞理を知らんと、渴くがごとき欲求をおこして來たのです。かくて、大乘佛教は、たちまちシナ民族を風靡したばかりでなく、やがて、漢民族の雄偉なる性格と、その特色ある文化と結びついて、こゝに佛教は第三回目の飛躍發展を遂げる事になりました。そして、あのシナ民族がいつの世までも誇りつゞけてよい燦然たる隋唐の文化は、これによつて拓かれたのであります。

この潮流は、やがて、海を越えて我國にとゞくのであります。日本書紀によりますと、この時、わが素朴なる祖先達の心を先づとらへたものは、やはり、この端麗なる佛像であつた事は、まことに興味深いことであります。このまばゆく美しい佛像をかこんで欽明の宮廷は、時ならぬ小さなさざなみを立ち起しましたが、やがて、國語も一定し、

これにしたがつて、世界的性格を帯びたまことの文化は、はじめて我國に誕生する事になりました。あの壯麗な奈良朝の文化は、申すまでもなく、この信念を基とし、隋唐の文化を手本として開いた美しい華であります。

然し、こゝで、注目せねばならぬ事は、茲において、我國が、たゞ高度なる藝術や文化を採り入れたといふ事だけでは無いことです。藝術や文化はむしろ末です。それより遙かに重大な事は、この時初めて世界的な宗教精神に接し夫れによつて今迄のせまい島國人の心から抜け出し、はじめて博くかつ明るい世界共通の心へとみずから高まつて行つたことであります。そして次第に世界人としての品位と自信とを作り上げて行つたといふ事であります。是は實に重大な事でありました。

「青丹よし奈良の都」と唱はれて、今も猶あの靜かな深緑の蔭にその名残りをのこしている美しい奈良朝の文化は、實に是を通じて我國民族が、自己の世界性を確かめようとする忙しい努力でありました。あの巨きな東大寺の大佛。あれに費やされた勞力や資財は實に大變なものであつたでせう。今日もなほ兎角その事を問題とする人達があります。然し、かゝる力を竭してやがて三國一と呼ばれるあの

偉大なる佛像が空に高く聳え立つた姿を仰ぎ見た時、わが民衆は是によつて、はじめて偉大なる先進國と肩を並べる事が出来たのみならず、更にその水準を抜き彼等を引離す事が出来たと信ずる事によつて、どれだけ大いなる精神の高揚と自信とを獲得した事でありましょうか。之は他の何物を以ても購なふ事の出来ないものであります。

この偉大なる大乘佛教の特長の一つは、その觸るゝ所の一切の文化の長所を吸ひあげ、その勝れたる品位と活力とを喪ふ事なく維持して進んでゆく事であります。この壁畫に於てギリシアの藝術は、まごう方なく、東洋の風格と結び、全く新たなる形象をなしておりますが、然もかつてのギリシア彫刻の品位風格は決して失つておりません。むしろその高きがまゝに、東洋の秀れたものと合して新しい藝術をなしてゐる。これはその觸るゝ所のすべての良きものを採り集めつゝ、しかも更におのが内部に於て新しい綜合をしてゆく大乘精神の特長であります。

特長の第二は、さらに内に向つてその民族の中に潛む價値あるものを抽いて高く之を押し上げます。シナ漢民族の思想文化が、この潮によつてどつと飛躍した事はさきに申しました。我國に於ても、民族の誇りとする長所は亦たこ

の線に沿ふて次第にぬき出されて行つたのであります。只今外國人など参りますと、我國獨特の文化として、すぐ引合に出される茶の湯、能樂などに至るまで、この精神の流れに沿ふて發展し形づくられて來たものであります。物事の眞の價値は、高い世界精神の上に於てのみ、正しく評價され、また發展するものであるからであります。

このやうに大乘佛教は、上下千五百年餘の歲月をけみしひろくアジア全大陸に涉つて流れ來つた人類精神の大きな河でありまして、いはゞ東洋全體に共通なる文化の根であります。その源は佛陀釋尊に發するものでありますが、單なる印度一國の產物ではない。その發生に際しても、すでに佛教以外のいろ／＼な印度思想と共に、西方諸國の文化をも併せて生長したものであります。更に其がシナ思想を吸収し、日本に來つて又新しい發展を遂げ、ちようど雪達磨がころがつてゆくやうに、その度毎に發展を續けてきたもの。いはゞ東洋全體の民族が、共に参加し共に形づくつて來た共同の財産であります。我々日本人がそうであるように、同じく多くのアジア民族が、夫々の文化の根源、心の故郷を、こゝに見出す事のできる大きな泉であります。

新しき出發の日に際して我々は、先づ之に還り、之を基とし、之を通じて世界民衆と心を一つにせねばならぬと思ふのであります。

(つづく)

人類が香料と云ふものを發見したのは印度のパミール地方で、そこから東西に廣がつて行つたらしい。其の埃及に傳つたのは紀元前二千七百年の頃だと云ふことで、初めは香木の樹脂又は木材を焼いて主として宗教上に用いられたが、個人の嗜好として用いられたのはエジプト帝國の初期の頃からで、ローマに入るや既に現在の吸收法に似たやうな方法に依つて香料が製造されるやうになり、ギリシヤに於ては「バラ油」が出現した程の盛況を呈する様になり、次第に歐洲に廣まつて、十二世紀の頃から英佛等でイヨ／＼盛に用ひられるやうになつたと云ふことである。印度は香の本家で古く吠陀の時代から盛んに用ひられ佛教の興起に依つて一層發達したことは特筆の要はあるまい。支那へも早くから傳つたらしく秦以前から既に薫香のことが行はれたと傳へられる。支那の香料に鬱金香と云ふのがある。これは百合の類の香草で祭祀の時に酒に和して用ひられる。日本への渡來は應神天皇十六年壬仁が經典を獻じた時に「蓉香」のことがあつたと云はれるが、佛教と同時に來たことは云ふ迄もあるまい。然し文献としては「推古天皇三年夏四月沈水香の木が淡路島へ漂着した。島人これを拾ふて焼くに其の烟遠く薫るので異なりとして之を奉つた」と云ふのが最初であらう。

彼岸隨想

松 濤 誠 廉

淨土教に傳はる觀法のうち最初に行ふものは、太陽が西に傾くとき空中に懸かる大きな鼓の様になつてゐるのを眺めつゝ思をこらすことであつた。これを傳えている經典が印度出來か、中央アジアで出來たものか今なほ不明であるが、日没の美しい印度としても、果しない平原の中央アジアとしても、この觀法は世間生活と宗教世界

とを結ぶ使命を充分果していたであらう。一日の赤熱、雜務の終りとして、休息と清涼の夕、やがて靜寂の夜がくる時、人生と死、あの世のことを考へさせずには置かなかつたであらう。これを淨土の先驅者は西方極樂と結んで考へさせたのである、何と云ふ勝方便であらう。

春分と秋分の日はこの太陽が眞西に沈む時である、その沈むところに正確に淨土があるのである。吾々が死後確實に往つて生れ得る喜びの世界があるのである。

そしてこの日の佛教祭典を彼岸會と云ふのである。この彼岸の名は學者によると、到彼岸の行、すなはち布施、持戒などの聖道門の

六波羅蜜から採つたと云ふ人もあるが、この太陽の觀法が淨土教にある以上は恐らくはそれは間違であらう、彼岸はその言葉の意味だけでよい。苦の輪廻の河のあちらの岸、即ち淨土である。彌陀の悲願の舟に乗じて吾々が確實に行ける極樂と云ふ彼岸であるからである、要するに、彼岸會は淨土會の異名でなければならぬ。

人類の宗教世界觀は科學のそれに變つた。宗教はその青春期から壯年期或は動脈硬化の時代に入つたかの様である。然し佛教の使命が人間の覺的改造にある限り、そして西方淨土の信仰が覺の信仰の一つの型である以上は、本宗の僧俗は共に淨土の信仰に確信を以て道を開くことが出来るし、またそうせねばならない。そしてこの淨土信仰に生命あるかぎり、お彼岸の祭典もその意味を失はないであらう。

お彼岸になつていつも思ひ起すことは、この日、四天王寺の西門の方角に丁度太陽が沈む、従つて四天王寺のこの門は極樂の東門と正確に對しているのだと誰かが教へて呉れたことである、そしてこ

の記憶は直ちに幼い頃の事を思ひ起させるのである。

自坊の西の方に小高い五六十坪の土地があつて、釋迦三尊を中心に十六羅漢を一體づゝ平面な石に畫の如く刻んで安置してある、こゝを羅漢山と呼んでいるが、終戦後は手も入らず荒れてはいるが、幼い頃には整然として清められ、そこに登つて見ると下の方は人家も稀で、三四丁ほど先を北から南に流れる笄川を越えて向ふの岡には赤十字社の平屋の病室が列んでいて、その少し左の方にはさる宮家の松林が廣く長くのびている、更に天氣のよい時にはこの松林の上に富士が、或は白く或は紫に或は黒くその時々之色合に見えたのである。

この羅漢山の西北の隅に一かゝえ位の菩提樹がある。小學校に行く頃には、丁度飛行機が始めて輸入されて青山原や代々木原で飛んだ時であるが、その時は弟と我先にこの木に乗つて、飛行機が飛んでいる間何時間も見ていて、よく師匠にしかれたものである。

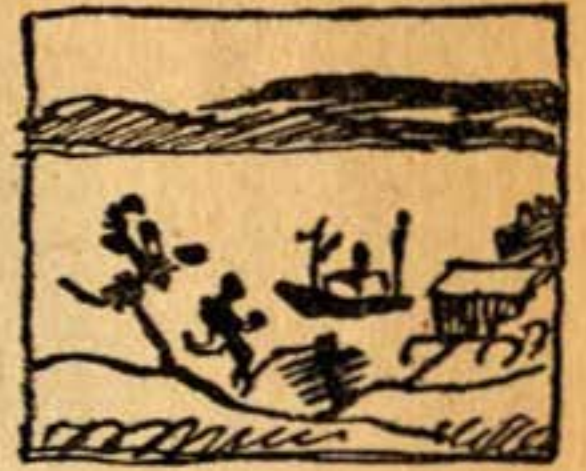
十六七才の頃漸く佛教書、それも大内青鸞師や加藤咄堂師の物を手にする様になつてからはこの山は小坊主ながら私の冥想の地となつた。加藤氏の「死生觀」「人の心」などもこゝでよんだが、やがて經典に移つていつて、本堂の本箱から發見した遺教經もこゝで始めて讀んで、勝手に解釋して、佛教の寂靜味に浸つた様なつもりでいた。淨土三部經は中學五年の終りになつて宗教大學入學試験の必要から始めて手にしたが、ある日淨土宗の坊主たる以上は日想觀だけでもやつて見やうと決心して、三部經と庭を以て羅漢山に登つた

のである。庭を菩提樹の下に敷いて坐つて——（その時釋尊が菩提樹下で覺を開かれたのを知つていたかどうか知らないが）目を眺め様としたが、光が強くて到底出来ない、この事はその時目が非常に痛かつたので今でもはつきり覺えているのであらう。そこで觀經を讀んで時を過した。

一切衆生生盲にあらざるよりは、目ある徒、みな日の没するを見よ、まさに想念を起して、正坐して西に向ひ、諦かに日を觀ずべし、心をして堅住し、想を專にして、移さざらしめて、日の没せむと欲して、かたち懸鼓のごとくなるを見よ。既に日を見をはりなば、目を閉ぢ目を開かむにみな明了ならしめよ。……

やがて太陽が眞赤になつて、赤黒い富士の少し右、赤十字の病室の眞上になつた時、坐りなほして目をこらした。この猿まねがどの位の時間つゝいたか覺えてはいないが、とにかく目が光の爲めに變になつて、その後二三日の間目を開いても閉ぢても變な眩影が残つて困つたことを覺えている。その時の感想がどんなものであつたか今でははつきりしていないが、美しい日没と西方の思と、佛教の教へる行を少しでもまた初步でもやつたと云ふ氣持は若い私を少からず得意ならしめたものと思ふ。

この若い時の情熱が、お彼岸になると自分ながら羨しく思はれるのである。その時よりは佛教に關する理解は勿論幾分深まつていようが、眞摯な熱意はかなり薄らいで居るのを悲しく思ふ。佛教はどうにかせねばならぬ。どうしたらよいのであらう。悲しい哉、お彼岸の時の思は今も昔も變らないのである。



了阿法師

八百谷孝保

了阿は安永元年淺草黒舟町のキセル屋村田氏の次男として生れ、

天保十四年七十二歳で歿し、下谷金杉の西藏院にある村田家の墓所に葬られ、法名は顯徳院一鶴了阿居士といふ。幼ない時から讀書を好み、歌をつくり、佛學に思ひをよせ、寛政元年十八歳の折、下男彦次をとまひ、家を出で、後、俗塵をさけて、忍が岡の北麓坂本の地に庵をかまへ、内典(佛書)外典(國書漢籍)の書を數多置きめぐらし、その中の僅かに膝を入るゝばかりの席に、起き臥して、専ら學問の生活に入つたのであつた。中頃一度實家にもどつたこともあつたが、晩年は淺草寺中の金藏院に住し、一生を終つた。

了阿が如何なる系統に屬する學者かは不明である。しかしながら國學中にも、特に當時流行の考證學派的色彩が濃厚である。歌は契沖に私淑して此の道より學に入り、研究を深め、更に佛教學にと進んだ。小山田與清も了阿を評して(撰書漫筆)

そも／＼今の歌人がおのが學びのはらわた見すかされじと、つらつきいかめしうもてかまへ、ものいひうちこはづくりて人おどす類ひには似ず、内典外典にわたりて、ちよろづの書どもをよみあまなひつゝ、うつし世をしのぶがをかのふもとにのみ、こがくれておはするぞ、やんごとなく、とほとくめでたきこゝろだましひ、おもひもたれたるや。

と云つてゐる程である。一切經を通讀すること三度に及ぶと云ひ、自らの自信の程は世上の目錄學者を誹つて

何もかも、みな見たふりを四書全書 閱藏知津 群書一覽

とうたひ、又「左傳文選外更不識書名、動欲輕神佛、斯云村學生」

とも云つてゐる。『了阿上人傳』は「博學を傳へ聞て、寺院にて講説を乞ふ事多く、それに出て講じたり、又各宗の學僧より、難問攻撃あるも、博く内外の諸典を引き、答辨響の應する如くなり」と記し

てゐる。何れにもせよ了阿の讀書力は強大であつて、正しく和漢に通じ、佛學に秀でゝゐたことを遺された著書、稿本等より知られるのである。

了阿の著作は數多あるが大體三つの部類に分けられる。即ち一つには歌曲の考證であり、二つには索引であり、三つには日記隨筆である。中に就いて最も注目すべきものには索引がある。索引が考證學者にとつて不可缺の道具たることは云ふまでもない。

考證千典 成山錄 語彙（以呂波分類）

日 纂 江談抄々錄 標目

鄭聲語源 藝林枝葉 事物類字

村田了阿隨記（分類索引） 大藏類音

鳥獸蟲魚類字 名義

等がある。

これらにつき論ずべきことがあるがこれは後の機會に譲らう。唯了阿の索引は彼自身のみの使用に適してゐると云ふより以外には考へられないものである。ともかく多大の勞力とこんきを必要とする索引造りに全生命を捧げたことは敬服に値するが一般に利用せらるゝように完成の域に達せずして一生を終つたことは誠に残念なことである。

（ 9 ）
著書中首尾徹底したものは僅かに『おいまつ考』『吾婦筆譜考證』外二三を出ていないのは淋しい極みであるが考證學者としての彼を

知るには充分である。

了阿は無味乾燥な索引つくりと地味な考證に日日を送つてゐる半面奇智をとばして世間を評し、花鳥を愛でて自らたのしむ人でもあつた。彼をめぐる人々には、大名あり、僧侶あり、戯作者あり、考證學者あり、書家あり、狂歌師あり、醫者あり、骨つぎあり、多種多様であつた。又了阿は狂歌をよくして、多くのものをのこしてゐる。それだけ眞面目の中にとぼけた皮肉な一面をも藏している。彼の遺筆の中の『花鳥薄伽梵泥恒圖經』は注目すべきものである。即ち

一日戲撰此圖經、既及過半惺然據梧而眠、忽感一夢、最窮迫焉、覺後爲窺冥虛掬神籤、則得凶相矣、因之不書果而止也

大梵天王 冠山老候是也〔松平定常〕

帝釋天王 西教上人是也〔西教寺潮音〕

密跡金剛 名倉先生是也〔名倉彌次兵衛〕

持國天王 京傳翁是也〔山東京傳〕

廣目天王 眞顔翁是也〔北川眞顔〕

増上天王 六樹翁是也〔石川雅望〕

多聞天王 柳亭先生是也〔柳亭種彦〕

波斯匿王 故中村氏は也

優填王 東條氏は也

驢唇仙人 米山翁是也

光昧仙人 光角先生是也

過去錠光佛 德元居士是也

過去拘留孫佛 德心居士是也

過去拘那含牟尼佛 智教居士是也

過去加葉佛 佛庵先生是也〔中村佛庵〕

淨飯大王 即今乾齋翁是也

摩珂波闍波提 慧燈大姉是也

花鳥薄伽梵泥恒圖經

須達長者 喜兄是也

阿難尊者 吉兄是也

文殊菩薩 掖齋翁是也〔符谷掖齋〕

普賢菩薩 靜廬子是也〔北靜廬〕

維摩居士 梅塢居士是也〔荻野梅塢〕

耆婆醫王 那須先生是也

加葉尊者 桂園子是也

目蓮尊者 東溪子是也

舍利弗尊者 文善子是也

優波離尊者 虎彌子是也

薄拘羅尊者 儀八老是也

車匿童子 本所彦次是也

百六十歳而未知頭痛、佛曰、於我弟子中無痴第一也
寛政元年六月朔日世尊出王城時此童子一人隨行

とある。さて了阿自身は釋尊に配してゐる程の自信家である。又金藏院地内に住せしとき、地代に關し寺僧に憤慨して檄文を作り、

俗僧に示す

夫れ、少欲知足は釋門の通義、饒益有情は諸佛の本懷、然るを何ぞや、奸計の甚しき、孔子ものたまへり、人を損して、自ら益するは身の不祥なりと、更に因果の道理をも辨へずして、空しく法衣を着す、笑ふへし、笑ふへし、今一つかさねて笑ふへし

未來にて三層倍の苦をうけよ かした地代をかりの世の中
若し此歌を不可也と、ぬかす傀儡坊あらは、來つて論せよ、したゝかに熊膽をなめさせてやらん、僧正院家智識長老をえらばす

と。
金藏院地内住、大藏讀誦 内外通達の沙門 了阿

此頃、了阿は、田原町の蛇骨湯に入り、板流にてすべり、腰の骨をうちしため、千住の接骨醫名倉彌次兵衛にかかつたことに對し俗僧どもは、これを聞きて、「我等を誹謗せし報ひよ」と嘲るのを聞て、彼は

腰強き相手のなきに力まけ、獨すべりしものじや骨の湯

と云つてゐる。風貌躍如たるものがある。

了阿は教育者となつて子弟の教養に當つたことはない。しかし彼

は折にふれ後進に對する研究指導を忘れなかつたことは幾多の實例を見出すのである。彼の著『一技餘芳』に

○法華經一部、貸し遣し候、隨分大切に拜見可致候、扱書面の趣、佛經のみ見度よし、御尤の事ながら、學問の道は、ひたすらに、左様のものにてはなく候、心の止るべき最上の道は、佛經にしくはなし、されど今日の世法は、又聖人の書を見ざれば、くらき事あり、和書も、また見ねばならず、細川玄旨法印曰、學問は乞食袋の如し、何にしても取込置べし、さて後に、えりわけよ云々、彼を取り、是を捨て、是を取りて彼を捨る事は、學問にては、きらふ事なり、何もかも見ねばならず、しらねばならぬ事とおもふべし。

○古人字書をかたはらにおきて、いとまあれは、よむといへり、先字の形をよく見覺えて、其音を覺え、さて其和訓を辨ふへし、是形音義を知るなり、初めて人に逢ふが如く、先其面部容貌をよく見て、其後音聲と性情を察するに似たり

今の字林などは、形類の字書なれど、音訓もそなへたれば、即三類を兼たり。故に當時のつとめは、此字音は何、訓は何と記憶せらるべき事、緊要にて候。

さて遊く／＼は、字彙といふ書、説文爾雅等、つぎ／＼に讀て、形音義に博くわたり侍るを字學者といふなり。文道の事は他伎とちがひ、千すぢ彌すぢ地にひろごりて、其名目すら容易におぼえ

がたければ、所謂復つたへ、及びごしなどにて、會得すべきにあらず、さればしば／＼訪ひて、傳へたく思ふ物から、老は心に任せず、是のみぞ身の怨みなりける、さぞ／＼いぶかしきふしなおほかるべき、古人いへることあり、一夕君と談すれば、十年の書をよむに増れりと、實に然り、すべて人は多聞ならざれば疑ひおほし、

たゞ人の思ふとは、雲泥の相違にて、莫大にひろきものにて候そは學びて後にしるべきになん有ける。

且吾國の世話字といふ物、しらずば有べからず、其名を和漢音釋書言字考といふ、俗に合類大節用といふ物也、

昔海老藏といひし俳優は、此書を枕にしていねたりといへり、常に此書を熟讀すれば、博物といはるゝなり、然れども、それは孫引學者とて、考證學者の嘲哂をまぬかれがたし唯々學問の本意は、萬物の本源に通じ、考證精密なるにしくものはなしと、おもはるべきになん、

なしてやまざれば、つひに其極に至る

晏子春秋曰 爲者常成、行者常至

なさざればならず、ゆかざればいたらず

○詩字標準（イシジキ）と云ふ小本、只壹冊あり、詩作の稽古本、是を始とす、とりいれおかるべく候。

○本文術書にて、シレキツタ事なれど、少年どもに解セマイとおも

ふ故、キツイ嫌ひナ俗文にカイて見する也。

ソレデモヤツバリしれずば、傳授をうけに来るべし、

おほき事を多イなどと云ふ。是を音便とて嫌ふ言葉なり

右やうの事、みな口授をうけされは、わきまへがたし、おひおひ彼は修行あらまほしく候

等々の教訓を見出すのである。

かゝる教訓は了阿の學問研究に對する見識より生ずるところであつて、一生涯を考證と索引造りに終つた彼にとつて、學問に無駄させまいとする後進者への親心が『書目童唱』なる著者となつてゐる。

本書は了阿生活の苦しい修學の體驗が、今後學問に志す初心者への目安を與へんとして作られたもので、編纂史書・神道書・雜史・法律・故實・系譜・辭書・日記・和歌・歌論・地誌・漢文學・國文學・註釋書・類書其の他三百十三部の圖書を取りあげ、それぞれの書名・著者名・著作年代・卷數・現行本の刊寫の別及び材料の良否等を七五調の長歌の形式にて作られ、和讀の調子にて子供の時代に歌ひそらんじさせようとしてゐるのである。

われ若きとき 學問の 東西南北 とり失ひ まわりみちして

晩景と 成れるを悔めば 今よりの 書の山道 たどるらん 童

子がともに しをりさし その目許りの 方角を 先づあらまし
に 諭すなり

とは、本書著作の動機を明かにしてゐる一段である。(正大・教授)

梵字

お塔婆とかお位牌の上に書いてある梵字は、インドの古代からある古い言葉梵語を字にあらわしたものの一種であります。

もと／＼梵語は、遠く、その源は中央アジアに發してありまして、一は東してインドへ、一は西してベルシアに入りヨーロッパ語の源をなしている點から、これをインドヨーロッパ語と總稱する位であります。双方の間には言葉とか、言葉の構成等に到るまで、よく似ております。これがインドに入つたのは大體紀元前千年から千五百年の間、今から三千五百年程前になります。

そこで、梵語がインドに傳わつて、之を書表わすのに、東洋民族セミチック族の文字に則つてインドで作られたのが梵字であります。丁度釋尊の亡くなられて後、阿育王の生前位に當りましたよう。

之をば、多く竹の先を割つてペンを作つたもので、木の葉——タラと呼ばれる——に認めたり、時には木のペンで書いたり、木の葉に錐のようなもので刻みこんだりしました。

この梵字の形もいろ／＼所により、大そう異つており、丸みを帯びてゐるのや、角ばつたりしてゐます。ビルマ、セイロン、シヤムなどの丸く、インド、西域、チベット等は角ばつてゐます。

日本で我々が見かけるのは、シッタタン(悉曇)と稱してあり、弘法大師、慈覺大師の傳えたもので、隋唐時代、約千三四百年前の字であります。當時のインドでも同様の書體を使つていましたからインド直流の形であります。

日本で我々のふつう目にふれるのは、大てい、尊い意味を、一字乃至數字で示す場合につかわれてゐます。たとえば位牌の上に書くのはキリク文字といつて阿彌陀様を表わしてゐます。

サーマルの 日本人村

(3)

白井 憲 成

かくて、米大陸の一角サーマルでは、通夜の會合が持たれるが、故人の追悼から、轉じて、各人々々の追憶と己れの生命を靜かに見つめる集ひともなるのであつた。

こうして、この地に死んで行く友人の數々は、勞苦を共々にして生きて來たのである。

せばめられて行く世界が、最後に通ずるものそれはたゞ一つなのである。たとへ今は、孫にかこまれていゝと言え、生きながらえた喜びは、それだけ死に面する時間をながびか

せるのである。それは年老いた人たちにとつては、生の喜び以上に苦しい。

話題は故人を離れ、回顧談に走つてしまふ。それは故人の業績をたゞえる事よりも、自分自分が『苦しかつたが、元氣だつた』往時に話題を轉換する事に依つて、友人の死から迫る現實感をさけるのである。それは結局過ぎ去つた事である。しかしその過ぎ去つた今では何うにもならない過去ににげ込むことに依つて、現實の苦から逃がれ、一時的なよみがえりを感じるのである。話題は、話題を呼び、止む事を知らない。話題だけが楽しいのである。お通夜などは、もつともふさわしき場所なのであらう。しかしそれは、あまりにもさみしき場所なのである。お通夜の晩はこのようにくれてゆく。

人間が、その最後に吐く言葉は純潔である。苦闘のあとは、美しく實のつてゐる。營々たる努力の結果は、美しい緑の平原となつて微笑んでいる。しかしそれは、今直面する

さみしさを消しては呉れない。

一時間程の距離の所に立派な葬儀所がある。日本では想像も出来ない程鄭重に死者を葬るアメリカでは、處々に驚く可き程立派な葬儀所がある。家族主義の日本では、家という一單位の動哭の中に、死者は葬られて行く。しかしアメリカでは、一單位は個人である。家といふ單位の上には、各々その家に應じた葬儀場が作られる。しかし個人個人と云ふ、アメリカの本質的な成立構造の上に立つ個人の爲めには、たとへ民營企業化されていてもそれは個人に對する社會の責任に於てなされるのである。家の集合である日本の社會と、個人個人の集合に依つて形作られたアメリカ社會とは、社會の個人に對する關係は、更に直接的であり、密接である。處々に見られる葬儀所の廣告は、アメリカでは何等不自然を感じない。

香り高いくちなしの花、紅白のカネーシロン色とりどりの花にうずもれて「千弗もした」

と云ふ立派な棺が安置されている。これらの花は、はるか遠い地方から運ばれて來たものだと云ふ。金屬性の立派な棺には、防腐材が完全に施されている。人々は此處で最後の別れをおしむのである。

別れが終れば、棺は二・三十分離れた近郊の墓地へ運ばれる。砂漠の村にも立派な共同墓地がある。パームという、棕櫚に似た木の並木にかこまれた墓地につく。日本の墓地に見るやうなしめつぼさ、陰氣さはない。日本の墓地には、生ける人ではなくて靈が宿ると思はれる。だから墓地は幽界にも通ずる陰氣さを持つのだ。しかしアメリカの墓地には、

何處へ行つても、この様な陰氣さはない。輕快である。相變らず百度をこえる暑さの中で、この芝生をそだてる爲に、あらゆる努力がなされる。これは死者に對する當然な義務だからである。掘り起された長方形の穴の上には棺を入れる更に大きなセメントの箱が準備されている。その中に收められた立派なその金

屬制の棺は、更に重いセメントのふたで完全に密閉されて、投げかけられる花につつまれて靜かに下へ降される。それも極めて簡更な機械で、二人のいんぎんな墓堀人で行はれる。ものゝ一時間もすれば、もとどほり、はぎととられた芝生が置かれてしまふ。たゞあとは土がしまつてから墓標がたてられるだけである。

こうしてそこに眠る日本人の數は、だんだんとふえてり、日本人村は老人が一人へり二人へりして行く。

たゞ居る場所だけをかへて行くやうである。

このやうに取り残されて行く老人たちに、共通に見られるのは孤獨の悲哀にも似た感情である。これは老人の誰しもが持つ感情には違いない。しかしそれにもして、深酷に感ぜられるのは、この自然の故であらう。しかしこの自然に對する不屈の闘は、見えざる、内なる、不毛の精神の原野にもいどまれなければならぬ。

ばならなかつたのである。數にしめされ、形に見える勝利は美しい。しかし内に輝く魂の泉は、更に不屈の闘ひに依つて、汲みとられなければならない。

幸にして、不毛の自然は、逆に素朴な信仰をいだかしめるのに條件は良かつた。素朴なと云ふ言葉は當を得ていない。要するに信仰は素朴なのである。彼等が都會居住者以上に熱心な信仰を持ち續けているのは、常に危機的な自然とむかひあつて戦ひに生きて來たからである。この自然が、むしろ逆に彼等に信仰的な生き方を要求したのである。機械化された喧噪からは末期的な精神分裂症以外には何も生れない。それよりも魔の自然から迫る大きな力の前に立つた時、むしろ始めて素朴的な信仰に生き得たのであり、又この信仰の故にこそ、この不毛の自然と闘ひ得たのである。

そこには孤獨の悲哀の中にも、見渡す限りの農場から、つぎ／＼と運び込まれる收穫の山にも似た悦びが感ぜられたのである。(終)

……創作……

吉 水 (二)



東 山 未 知 夫

「二人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行」

「十界一念、融通念佛、億百萬遍、功德圓滿」

永久五年に良忍上人が此の偈頌を阿彌陀佛から直授されて、融通念佛宗を開いていた。

利己心に基づく弱肉強食の巷に於ては、弱い人々は、精神的に頼り合うことのできる他者を互に求め合っていた。物質的な共同には限度がある。一回の兵火によつて、自己のものと想っていた財物は一夜のうちに烏有と化してしまふ。幸い兵火から逃れた者も、盗財の来襲にたえずおびえなければならなかつた。互いに助け合うという固い約束をしていた人々も、争亂の刀や槍の音を聞けば、皆吾れ先きに逃げて了う。此の世には、心から頼ることのできる他人は誰

もない。

本當に心から頼れる人々、絶對確實に憑み合うことの出来る仲間は無いものだろうか。人々は来る日、来る日を、焦燥の心を持つて迎えねばならない。人々は落着きたいのだ。心から落着きたいのだ。大きな安心を得たいのだ。

この時である。「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行」の聲が響いて來たのは……。

『一人が念佛すれば、それが一切の人の功德となる。又、一切の人の念佛が一人の功德の人々の念佛が自己へと融通されて来る』

こうして、弱い人々たちは、互に念佛を融通させることによつて彼等の心の團結を形成して行つたのである。念佛の力を紐帶として彼等の心の相互扶助を求めていつたのである。彼等の現世の力ではどうしようもないような天災地變、鬭亂、強盜等々に對して、彼等は佛の力を紐帶として結ばれて行つたのである。彼等は互いに他人の協力を求めていた。しかし、現世の物質的な契約によつては、互に他人の協力は信頼できなかつたのである。従つて、彼等は、現世の物質的な契約によつてではなく、超世の佛の力を媒介として互に他の人々の協力を求めたのである。念佛による他力。その他力とは

さまに他『人』の力であつた。

このように、天災地異、戦亂盜賊の巷にあつて、強者の力に苦しめられていた。弱い人々は、毎朝

「彌陀所傳融通念佛億百萬遍決定往生」

と唱へ、その偈文につゞいて念佛十遍を稱へるのである。そして、この起行によつて、彼等は佛の力を紐帶とする心の弱き人々の「心による團結」を形成して行つたのである。

この融通念佛の教へは京洛を中心として、その附近の人々の心の中に弘まつて行つた。そしてこの教へを人々の心の中に残し留めてその開祖良忍上人は遷化して行つた。

良忍上人の遷化の報が、美作路にまで傳つて間もなくである。時國の館は、待ちに待つた男子の安産のために、喜びで溢れていた。

長承二年四月七日正午、時國の長男として、玉の如き男子が産聲を擧げたのである。この産聲こそ正さに、淨土宗祖法然上人となるべき男子の、此の世に於ける説法の第一聲なのである。

喜びに満ちた、漆間家の人々の目には、今日の自然の風物もまた喜びに溢れて映つた。空に浮んでいる雲も、今日の出生のために特に美しく見えた。又館の西にある棕の木も、その根元から二またになつた。樹の形そのまゝが、恰かも二流れの幡のように見えた。喜びに溢れた人々の目には、周囲のあらゆるものがみな、今日の出生を祝つて悦んでいるように映るのである。

人々の喜びの中に生まれた見、殊に父母によつて永い間待ち掛け

られた見は、月日とともに健やかに育つていつた。そして幼名を勢至丸と呼ばれていた。天性聰明であつて、五六歳の頃には、すでに智力は大人と異なるところがなかつた。

一方、當時の社會状態はどうだつただろうか。長承二年は全國的な凶作に見舞われていた。殆んどが農業を主體とする日本の産業形態であつてみれば、天候の良否が日本全國の收穫に對して決定的な要素となる。農民は米の不作に對して、誰れにも恨みを持つて行きようがなかつた。天候によつて全面的に支配される米作に於ては、人々は唯だ空しく天を恨むより外に仕方がないのである。

京洛からは、米を早く獻上せよという催促が矢の如く放たれて來る。しかし收穫されない米は、いかに善良な農民といえども、これを京洛へと獻上することは出来ない。農民達は山へ行つて松の内皮を削つて食べた。又山路に入つて熊笹の實を集めては飢えをしのいでいた。或は野道に自生する「つばな」の若穂を生のみゝ食べていた。

京洛では、一部の人々を除いて、殆んどが飢えに泣いていた。飢死者の死體が日増しに數を加えて行つた。都大路は餓鬼と乞食との展覽會場に早變りした。そして、このような状態は、田舎に於ても同様である。草の根本の皮のみではとうてい農民の飢えを防ぐことは出来なかつた。人々は莊園の貯藏米倉庫へと集まつて行つた。又領主の米倉へと群がつて行つた。

しかし莊園や領主たちの手の打ち方が一足先きであつた。彼等の

米倉を守るために屈強な男を既に募集していた。屈強な男達は、米倉を守るために領主達からの食糧の保證を受けている彼等は莊園や領地の番人として、半職業的な武力の保持者となつていたのである。飢えた農民達が、莊園や領主の米倉に押しかけても、またく間に追い散らされたのである。武力のない農民達は、誰からも保證されることなく、山野を徘徊して野生の木の實や木の皮を求めて飢えをしのいで行かねばならなかつた。そしてこのような飢餓の様相は全國的な規模に於いて繰り擴げられていたのである。

さらに悪いことには、翌、長承三年も亦続いて全國的な凶作に見舞われたのである。正さに天下は飢饉の一色に濃く塗られて行つたのである。飢死者の数は数えるいとまもなかつた。全國が飢餓と群盜の巷と化したのである。都大路の羅生門の樓上には餓死者の死骸が果々と積まれたまゝ、惡臭を放つていたとさえ云われる。しかもその門の下は、ぼろをまとつた市民や乞食が最も常規の往來客であつた。

火事や盜難は日常茶飯事とさえなつて了つた。このような亂世が三年ばかりも續いた後、保延三年二月にはまた／＼厄介な事態が起つて來た。南都興福寺の僧徒七千人が神木を奉じて入洛噉訴しようといふのである。僧徒の暴舉に對しては、それを人力では防ぐことが出来なかつた。それは既に天然現象の一つと見做されてをり、正さに無人の境を行くが如く洛中を暴れ廻つたのである。

興福寺僧徒北上の報は京洛の人心を極度に震憾させた。人々は現

實に於て末法の兆を體驗したのである。飢餓・群盜・僧徒の暴舉。末法の條件は正さにそろつていた。このとき勢至丸は五歳の年齢を數えていたのである。

敏感な勢至丸はすでに末法の世を感じ取つていた。時國はここ數年來の飢饉のため、館内の米倉を開いて、庄内の農民に頒つていた。従つて館内の生活は農民と同じ状態で續けられていた。館の屋根には雜草が生えていて、その延びた莖が風になぶられている。塀の壁も所々壞れたまゝになつていた。勢至丸はその壁の泥をねつて一體の佛像を作り、館の西の築山の上にまつていた。良忍上人の説かれた阿彌陀佛になぞらへたのである。

一日の終りに近づき、夕日が西に沈もうとするとき、築山の上の阿彌陀佛の像が、太陽の光を背後にうけて、恰も太陽の中に佛像があるように見える。さらに、太陽の位置と佛像の位置とが一致して太陽の光線が恰もその佛像の光背の如く輝やく瞬間がある。勢至丸は、この瞬間を特に貴いものとして選んだ。西方の淨土はこの佛像と太陽とを結んだ線の延長の上にある。平安朝の貴族が憧れていた西方淨土は、勢至丸によつて作られた一塊の土の像によつてより具體的に『指方』されたのである。

人々の一日の営なみが終つて、太陽が西に沈もうとするとき、勢至丸は、築山の上の阿彌陀佛の像を陽してその背後の太陽の光のうちに、人生の営なみの終局の所期としての淨土を感じとろうとするのであつた。(つづく)

阿彌陀經の話

(三)

藤井實應

「その時、ほとけ長老舍利弗に告げたまわく、是れより西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり名づけて極樂という。その土に佛まします阿彌陀と號したてまつる。今現にましまして說法したもう。」

その時、釋尊は長老舍利弗に對つて法を説き初められました。「その時」とはいよいよ大說法の開かれるその緊張し切つた時をいうのでありますが、それで私たちは「その時」を「今と」心得て、私たちも心靜かに而も緊張して舍利弗と共に釋尊の說法を承りたいと思います。佛陀釋尊の佛眼にうつつた事實の說法には少しのあやまちもありません。佛の御眼に映じたことを誰にも分り易くお説きになるのであります。この本文をすらすらと讀んでそれをすなほにそのままにうけとることが信あるものゝ態度であります。

舍利弗に釋尊の說法を聴いている代表者であります。高祖善導大

師さまは『法事讃』に「釋迦如來の舍利弗に告げたまうのは、即ちこれあまねく苦しめる人々に告げられるのである」と御解釋になつております。それでありますから、釋尊が、「舍利弗よ」と仰せられたことは、「私」自身の名をお呼び下さつたことゝ心得て、私に直接說法下さる思いでそのみ法を承わりたいと思います。

「舍利弗よ、これから西の方十萬億の佛土を過ぎた遙かな所に、極樂という淨土がある。そこに阿彌陀という佛がいらせられ、まのあたり法を説いておられるのである。」と釋尊は仰せられました。それがすなおにうけとられ信ぜられるならば、それが最もよいことなのであります。また、信が深まればそのまゝに信ぜられる筈であります。古の人達はおそらくみなすなほにそのまゝうけとられたでありましょう。ところが現代の教育を受け、科學的な訓練を主として受けてきたものにはすぐにひつかゝりを感じます。西方十萬億といわ

れるが、地球は圓い、そして常に動いているではないか、西方十萬億の遙かなところとは天文學のどの方を指すのであるか、など、疑問をおこすのも無理ないことであります。それゆえ、そういう疑問のおこる人々にも了解して頂けるように一應説明することも必要となつてまいります。

經典を拜讀するものは先づ第一に阿彌陀經をはじめ佛教の經典は地理や天文の教科書でないことを知るべきであります。地理や天文のことが述べてあるとしてもそれが主題ではなくて、佛教の思想を以て佛教の信を語つてゐるものなのであります。それゆえ、處とか世界とかいう言葉は地理的に解すべきでなく、思想や信仰の状態をあらわしていると解すべきであります。この『阿彌陀經』は淨土の依報（身心の依り所となる果報、即ち極樂のこと）や、正報（自己の業因によつて與えられた身心の果報、即ち阿彌陀佛）のすがたを象徴的に述べられたものであります。そうした象徴的な表現によつて眞如の實相、信仰の状態を明らかにされたのであります。淨土は穢土に對する言葉でありますが、現實の苦しみ惱み、迷い、穢れのある穢土といわれる世界（狀態）に對してそれを超越した、苦惱のない、おさとり、清淨な世界（狀態）をいうのであります。現實の當面している穢土はよく分りますが、それを超越した淨土はなか

な分りにくい、超越的なものはどうしても象徴によらなければ表現できぬものであります。それでこの經は淨土の依報正報を象徴的に述べられたのであります。象徴によつてのみ内在の意もよくあらわすことができます。それでありますから、この『阿彌陀經』のよきな象徴的な表現は、すなほに感ぜられた信の世界を示したものだといえます。この意味ではじめて、私たちはこの經の眞實の意味を理解することができるのであります。

少し話がむづかしくなつたようです、もつとやさしく具體的に考えてみましょう。今日科學的な根據によつて地動説は誰でも承知していますが、私たちの感覺の實際は、今日でも、やはり、太陽や月は東から昇つて西に没するものと感じます。この經は、その感覺に訴えてのすなほな表現であると受けとりたいのであります。即ち太陽も月も東から西へ進むことから、萬物の進む方向を西とあらわしたのであります。人生の進むべき方向、人生の歸起するところを西方としたのであります。そのことは、すでに千三百七年前（西紀六四五）に没せられた道綽禪師が、『安樂集』という御書物に次のように示されております。

「何ゆゑに西方に向つて、淨土を拜み、念佛するのであらうか。此の世界に於ては、太陽は東より出で（生）、西に没する（死）のであ

る。故に人生の夕に、死にゆく神明の趣くところを西方とするのはわれらに親しく、又便利である。故に法藏菩薩、佛となりたもうや西方の淨土よりわれらをあわれみ迎えたもう。だからわれらも亦、世上一般の禮儀と同じく、その呼びたもう方へ向つて禮拜し、念佛するのである。尤も自由自在に何方へでも速かに飛びゆく能力ある聖者ならば、東西南北、方向などにかゝわるわけはないが、われら凡夫は、一方へ向えべ他方へは向われないのだから、東や南へ向えば、西方へ往くことはできにくいのである。〔意譯〕と。その意、明らかであります。要するに太陽が東から出て西に没する通りに、私たちの生の趣くところ、死の歸するところを西方と示されました。即ち人生の歸趣するところ、その方向に極樂の淨土があるのであります。

西方の意は一應分つたとして、「十億の佛土を過ぎて」とは如何に味うべきでしょうか。

人なみのまなこにて見ば十萬の

億土のかしこも人の世ぞかし（山崎辨榮上人）

極樂は實に私たち凡愚の思いも及ばぬ、はるかなところにあります。時宗の開祖一遍上人は、

「是より西方十萬億の佛土を過ぎて」ということは、十萬億の里數があるということではない、衆生の妄執のへだてをさすのである。」と申されました。十萬億佛土（あらゆる世界）を過ぎてという「過」ぎるは、「超過」するの「過」であります。即ち超越しているから、また十萬億佛土にも内在することが感知されるのであります。それゆえ『觀經』には「極樂は此を去ること遠からず」と説かれ、この經との矛盾した表現の中に眞實の世界を感得されるのであります。

南無阿彌陀一聲ごとに十萬億

なに遠からむゆきかよふなり（辨榮上人）

極樂は十萬億とへだつれど

南無阿彌陀佛に通うあしもと（椎尾博士）

あまりに近いが爲に、或はその眞只中にあるが極樂は遠くて近いのであります。爲に眞相は分りにくいものであります。富士山に登つてゐる時には、富士の姿はよく分りません。ずつと離れてみると、その美しいすがたがよく分るようなものです。實に十萬億の彼方にあつて、私たちの心も思いも及ばぬところでありますが、また念佛申す一聲の中にゆき通うて、眞近に内感されるのであります。そして念佛を勵みますと

十萬の億のかしこにひき出され

ますます遠き心を知る（辨榮上人）

ことゝなり、また

極樂ははるけきほどゝ思ひにき

ミオヤの光知らぬむかしは（辨榮上人）

ともなるのであります。矛盾に似たる表現のように思われるかも知れませんが、かゝる表現をおして眞實相は明かにせられるのであります。如法に信じ、如法に行じたならば、それが眞相であることをよく了解しえられるでありますよう。

極樂淨土に阿彌陀佛在して、今現に説法したもうと、説かれまして。阿彌陀佛は實に今現に在して説法したもう、「今現在説法」のいまほとけであります。今日のこの私を明るく導き育て下さる活き佛であります。

「現に説法したもうている」と説きたもうは釋尊のお言葉にまちがいはありません。釋尊は現に阿彌陀佛の説法したもうをお聴きになつてそれをそのまゝ私たちに告示し下されたのであります。しかるに私たちはその説法の聞えぬというのはどういふわけでありましようか。

みほとけの中とも知らで眠り子は

生死の夢にうなされにける

呼びませるみ聲はあれど聞えぬは

迷の眠り深ければなり（辨榮上人）

阿彌陀佛の今現在説法の聞えぬのは、私たちが生死の夢をむさぼつてゐるからであり、迷いの眠りが深いからであります。み佛の教を信じ、教のまゝに行じたならば、阿彌陀佛の説法も聞くことができますよう、私たちが道を求めて、法話を聞き、經文を読み、或は松吹く風の聲、流るゝ谷川の水の音、そのほか種々の見聞をおして念佛の心が生じ安らぎを得たならば、それが悉く阿彌陀佛の今現在説法のすがたと拜せられるようになるのであります。まことに、如來は大慈悲憐れむことなく、常にあらゆる相を以て説法したもうてゐる。「正覺の大音は響十方に流る」と『大經』にも説かれてあります。私たちのつんぽになつた耳にまで、何とかして聞かしてやりたいと常に念じたもうておられるのであります。それは死後のことではありません、未來を待つまでもありません。今現にこゝに私たちが、そのみ佛のお力によつて生かされ、み佛の光に照されていきます。そして常に導かれ恒にお育てにあづかつてゐるのであります。それは次で説かれる極樂莊嚴によつて、今現在説法の意は一層明らかになるのでありますよう。（つづく）



兄弟雀

寺田 豊子

兄弟雀はちゅんちゅくちゅん

なかよし雀でちゅんちゅくちゅん

朝ははよからちゅんちゅくちゅん

なかよしこよしでちゅんちゅくちゅん

朝です。兄弟雀がよこ子ちゃんの家のお庭の木に引越して来ました。

兄さん雀はお米を、中の雀は木の實を、弟雀は虫を集めて来てなかよく三羽でたべました。ちゅんちゅくちゅん。

よう子ちゃんの家のお窓をそつとのぞいてみましょう。

「よう子ちゃん、さあ起きなさいよ。」おかあさんの聲です。

「うーん、うーん。」

よう子ちゃんはまだふとんの中で眼なんかまだちやんとあきません。

「困つた子ですね、お隣のまさしさんなんかもうとつくに起きましたよ。」

これをみた兄弟雀はびつくり。

「おやおや、あんなねぼ助がいるんだな。」

三羽は顔を見合せました。

次の朝です。けさは曇つたへんなおてんきです。それでも兄弟雀はやつぱりちゅんちゅくちゅん。元氣にそろつてちゅんちゅくちゅん。それではよう子ちゃんの家のお窓をまたのぞいてみましょう。

「よう子ちゃん。まだ眼がさめないの。」おかあさんの聲です。

「うーん。」

一度首を出したよう子ちゃんは、またひとつこめてしまいました。

「本當にしようのない子だわ。」

おかあさんは半分あきらめてしまいました。

これをみた兄弟雀はまたびつくり。

その次の朝はそれはすてきなおてんき。お日様はきらきら、雲は金と銀にかがやいています。兄弟雀はいつもの五倍ぐらい元氣にうたいました。

ちゅんちゅくちゅんちゅんちゅんちゅん。

よう子ちゃんの家のお窓はどうでしょう。

「よう子ちゃん、きようはすてきなよいてんき。さあさあ

「お眼々をさましなさい。」

うたうように美しいおかあさんの聲です。

「うーん。」

それでもよう子ちゃんはやつと眼をあけました。

「おやおや、きようはやつといい子になつたわね。ごはんに卵をかけてあげましょう。」

よう子ちゃんはやつと起き上りました。

「おやおや、あなたの髪の毛、毎朝ねぼうでとかさないから、ほらほらこんなに雀の巢。」

おかあさんは早速、鏡臺からくしをもつて來ました。

これをみた兄弟雀はもうびつくり仰天。腰を抜かしておどろきました。

雀の巢なんて困ります。これもよう子ちゃんが朝ね坊だからだとわかりました。もうだまつてはいられません。三羽はいろいろ相談をしました。

次の日の朝、お日様が半分顔をお出しになつた頃、三羽のうちの弟雀はよう子ちゃんの家の窓の手すりにとまりました。弟雀はかくせきばらいを一つすると、ちゅんちゅんちゅんちゅくちゅん、とやさしく歌をうたいました。よう子ちゃんの唇がびくつと少し動きましたがそれでもまだすやすやねむつています。

今度は中の雀が手すりに止りました。おつほんと一つせきばらいをすると、ちゅんちゅくちゅんちゅくちゅんちゅ

んちゅん、とやりました。よう子ちゃんの鼻がむずむずと少し動いたようでした。それでもやつぱりすやすやねむつています。

兄さん雀がしずかに出て來て大きく深呼吸をすると、ちゅんちゅんちゅんちゅくちゅんちゅんちゅんと、聲もきれいにかなり大きな聲でうたいました。よう子ちゃんの臉がびくびくつと動きましたが、またそのまゝすやすやねむつてしまいました。

けれども兄さん雀はたしかによう子ちゃんが少しわらつたのをみました。弟雀をばたばたよびました。

兄さん雀に合圖をするとタクトを振りました。

ちゅんちゅんちゅんちゅくちゅくちゅんちゅん

ちゅんちゅくちゅんちゅんちゅくちゅんちゅん

どうです。よう子ちゃんがばつちり眼をあけました。

「おかあさん、いまなんじ。もうあさね。おかあさん、いまだれかうたつていなかつたかしら。」

「さあ、おかあさんにはきこえませんでした。」

「たしかに遠くでさつきからきこえたのよ。あたしはそれで眼がさめたの。」「きようはなんていい子のよう子ちゃんおかあさんはほんとうにうれしいわ。」

ふたりのお話をきいていた兄弟雀はにつこり顔を見合せてわらいました。

兄弟雀はなかよくもとのお庭の木にとんで歸りました。

門 入 教 佛

(二)

常 信 中 竹

三 なやみとまよいのもと

沙婆は苦の世界ともいわれる。四苦、八苦の毎日である。生まれるも苦、老ゆるも苦、病いも苦、死するも苦。苦しむことが人生とも感じられる。金のないのは苦しい。貧乏はつらい。だが、金のあるのも苦である。經文は「有田憂田、有宅憂宅」という言葉がある。

田があれば田があるで、草取りもせねばならず、米も作らねばならぬ。税金も拂わなければならぬ。家、屋敷があれば、これまたあるで、火事の心配、泥棒の用心、破損の修繕など苦勞である。貧乏が續き、苦勞が長引くと、人はよく、「こんないやな世の中は、生まれて來なければよかつた」というが、これは無理な話であり、また二度と生まれるというところのない、この尊い生命を、ないがしろにするものである。生まれて來たからには、いくら辛くとも、苦しくとも、悲しくとも、ぢつとそれに耐えて、己れの人生を生きとおさねばならない。それが人間のつとめでもあり、

また權利でもあるのだし、どうせ生きるからには、少しでも明るく、楽しい人生を送るべきではなからうか。

苦しい、辛い、悲しいと、不平ばかりいつても、生活は少しも樂にも嬉しくもなりはしない。ただ不幸をいつていないで、何故、このように苦しいのか、どうしてつらいのかということをし、そのもととまでたずね求めて行つたのが、釋尊であつた。そして、その最後に、そのような氣持ちの起るのは、「無明」ということに原因するものであると語つた。釋尊の教え、即ち佛教は、ここから出發しているのである。

無明とは明かでないこと、暗いこと、愚かなことという意味である。いいかえると「自分」というものに愚かしくもこだわっていることである。自分の家、自分の名譽、自分の財産。すべて自分ということを中心を考えるから、怨みも湧き、悲しみも生まれるのである。自分というものを抜きにしてしまえば、そこには、争いも欲も起らず、平和な樂しさ

が溢れる。混んだ電車の戸口で、しまりかけたドアを押えながら、「もう一人だから乗せてくれ」とどなたた人間が、自分が乗つてしまふと、つゞいて乗ろうとする人々に向つて今度は、「もう一杯で乗れないよ。次の電車まで待て」といつているのは、決して笑えない、自分の姿でもあるのである。こんな人々ばかりの世の中では、喧嘩も起るだろうし、嘘もつくだろうし、面白くも楽しくもないのは當り前である。ここで一寸立ちどまつて、

自分をなくしてみよう。もう一人丈に乗れる餘地があるのなら、自分よりいそぎの用事をひかえている人にゆずつたら、どおいうことになるだろう。人にゆずること、これが此場合、自分をなくすこと、即ち無明を拂うことになるのではあるまいか。昔、戦國時代のこと、快川和尚という坊さんは織田信長の佛教迫害に反抗したところ、にわか軍勢が攻めて来て、和尚のいる寺に火をつけた。弟子達は早く逃げるようにすすめたが、和尚答えて「心頭滅却すれば火もまた涼し」といつて、

平然として火焰に包まれて滅し去つた。心頭即ち自己を滅し去れば、火もまた涼しく感じられる。すべてのまよい、怨み、苦しみの根源は自分というものを中心とするところにある。だが、一體「自分」とは何だろう。我とは何か。

我が今日こうやつて生きていることは、一體どういふことなのであろうか。私とはこの肉體なのであろうか。肉體の中に宿る精神なのだろうか。肉體とは一體何なのだろうか。父母によつて生み出され、それが發育して大きくなつた、細胞のかたまりにしかすぎないではないか。單なる肉體だけなら、馬も牛も犬も猫も持つてゐる。それなら、人間特有の「精神」が私なのだろうか。その精神とは一體どこにあるのだろうか。胸にあるのか、頭にあるのか。自分というものを分析してみると、ラツキヨの皮をむくように、何もなくなつてしまふ。なくなるのが當然なのであつて、元來「我」だとか「私」だとかというものはありはしない。天地、社會、父母、その他色々の

因縁が寄り合つて、かりに現われた影にすぎないのだ。水にうつる月の影のように、あるとみえて、實はないのである。このありもしない自我を、あるかの如くに思い、而もその影のような「我」がおこす色々の欲に馳られて、あつたら貴い五十年の一生を、不平不満のうちに空費してしまふ。何と愚かしいことであらう。それというのも、影のような「自分」というものを、あるかの如くに考える「無明」——愚かさ——が、この人の世をつらい、苦しいものにしてゐるのである。釋尊はまず、この無明をとりのぞくことを以つてその教えの出發點としたのである。

「俺が」「私が」といふ言葉をつつしむことが、小さくは夫婦和合、一家團樂の基であり大きくは國家社會を、此世ながらの淨土に作りかえる要諦でもある。

四　すでにわれは救くわれ てゐる

影の如くに、あるようにみえて實は何もな

い「我」に執着するところに、現に見られるような、争いと憎しみと疑いの世界があらわれて来る。誰一人として、この世の中を住みよい世界と思うものはない。すべての人が、もつと楽しく、もつと平和な世界を望んでいる。

然し、悲しいことには、人間の力ではそれが出来ない。原子爆弾を發明してみたもの。今度はその仕末に困つて、色々と頭を悩ましてゐるのが、人間の姿である。

「譬えば犬に枷して之を柱に繫げば、終日柱を繞りて離るゝこと能はざるが如し。一切の凡夫も亦是の如し。無明の枷もて生死の柱に繫がれ、二十五有を繞りて離るることを得る能はず」——涅槃經。

棒につながれた犬が、棒のまわりをぐるぐる歩いて、ついには紐がからみついて、自分で自分ののどをしめてしまふ、丁度そのように、人間も自分という柱を中心として、煩惱の紐でつながれて、ぐるぐるとめぐり歩いて結局はそのまま死んでしまふ。いつまでたつても、この沙婆世界を離れることが出来ない。

い。このように、人間は、自分の力や智慧だけでは、此の世の争い、悩みを滅し去ることが出来ない。「俺が」と氣張る人は、未來永劫救われることがない。

ここで、佛様——阿彌陀佛はこのような、愚かしく、あさましい人間を何とかして、美しく美しい國に救いにつてやりたいと、身を賭して誓われたのである。即ち、四十八の願いを建てられたのである。阿彌陀佛が佛となられたのは、その前身である法藏菩薩の時に建てた、四十八の誓いをすべてなしとげて現に西方十萬億土のかたに極樂世界をつくられて、苦の沙婆世界をなげき悲しみ、佛の慈悲にたよりすがろうとして、臨終の最後の息にでも、南無阿彌陀佛と稱えたものを救いにつて下さつてゐるのである。

法藏菩薩は色々の誓いの願いを建てられたその中で、「もし一聲でも念佛をとなえて、佛の力にたよりすがろうと念ずる者は、その命の終る時、必らずその人の枕頭に來迎して、

その人を極樂世界に連れて行つてやるぞ」といわれ、既にその誓いはたして、吾々の命終るのを、彼の國淨土でちつと見守つていて下さるのである。臨終、一聲の念佛だけでも佛様は雲に乗つて私共をお迎えに來て下さる。いわんや、折にふれ、志しを立てて念佛を稱える人の所へは、必らずお迎えにお出で下さり、間違ひなく淨土に導き連れて下さることは、大地に槌を打つて誤ちのないように確かなことである。

彌陀たのむ心のうちにへだてなき

佛はさらに身をもはなれず

躍空上人

まことに、念佛を稱える人には、佛は必らずいつもはなれず、その身を守つて下さる。

阿彌陀佛となふる聲を梃にして

くるしき海をこぎわたるらん

源 俊賴

念佛を稱え、佛と共に生きてこそ、生活の指針も定まり、住みにくい沙婆を無事に暮らして行けるといふもの。(つづく)

學寮の篤病人

須藤隆仙

いつの日だつたか友人から一枚の短冊をも
らつた。

短冊と言つても實用紙を細長く切つて、上
下に俳畫風の模様を粗惡な繪のぐで書きほど
こした見るからに粗末なものであるが、幾何
もない餘生を獨り淋しい養老院に日送りする
一老人が作つたものだと言ふ事だつた。そし
てその老人が作つた。

うすれゆくやえのみならで人の身も
いづれはきえん遠きかなたに

と云う歌が、人生と題されて書きとゞめられ
てゐた。

歌の脇下には一樂と記し、これも又手製と思
われる印が力弱くおされてゐた。

私はその短冊を部屋の右側の柱にかけておい

た。

又ある日、とある所から椎尾大僧正の御筆
になる短冊を頂いた事があつた。

紙質も良く銀粉で色どられた美しい其の短
冊には、共生きの精神を歌つた。

かぎりなきめぐみのひかり身にあびて
今日もみわざにいくるうれしさ

と云う歌が書染められてゐた。私はその短冊
を部屋の左側の柱にかけておいた。

前の夜に呑んだ酒に祟られてか、頭に石の
様な重みを覚えながら、外には一面に朝涼が
敷盡されてゐる事であらう六疊の部屋の中で
私は目をさました。

起きようともしせずに、氣の抜けたような部屋
の中を見廻した。

短冊があつた。短冊があつた。

あの老人が書いた短冊と、大僧正が書いた短
冊と、短冊が二枚あつた。

『うすれ行く、八重のみならで人の身も、い
づれは消えん、遠きに彼方に』私は先づ老人
の書いた短冊を眺めた。

普段はさほど氣にもとめなかつた此の短冊が
この日に限つて強い強い吸込んで行くような
力を現わしてゐた。

不思議だつた。全く不思議だつた。

靜かに、靜かに、此の歌の心を讀んでみた。

人生とは、うすれ行く八重の如くはかなく消
えて行くもの、何處かは知らぬが遠い遠い彼
方え。

この歌の心は悲しい。

そして又、此の老人も悲しかつた。養老院に
日暮しする老人……。

私もこの老人と一緒に泣きたかつた。私は

まだ若い。だが先は眞暗である。だから私も泣きたかつた。大きな大きな悩みがある。

其の悩みはこの生命は消えぬとしても、いかなる生き方に甘んじなければならぬかと云う點に於ては眞暗なのである。

まだ死ぬとは思はない。だが生き行く事自體が眞暗なのである。

共に、泣こうよ。互に悲しもうよ。

私は其の老人の名を呼んでみた。

瞬間、はつ、と思つた。其の老人の名は一

樂であつた。唯、一つの樂しみであつた。

悲しい悲しい歌ではあるが短冊を造つて、自づからの悲しい歌を書くのが、此の老人には唯、一つの樂しみだつたのである。

何邊か何邊か短冊に向つて私はうなづいた。樂しみ、唯、一つの樂しみ、

今日も又生きてゆこう、私も自づから唯、

一つの樂しみを見つけ出して、

頭にはいつの間にか朝日があつてゐた。

外の朝凍もこの朝日で今はすっかり溶け消え

た事であらう部屋の途中で私は大きく頭をころがしながら左の柱を眺めた。

大僧正の短冊が其處には此の篤病人の爲なのか、健やかな時の手でかけられてゐた。

限り無き、恵ぐみの光り 身にあびて

今日も御業に生くるうれしさ

そしてこの精神的な篤病人の爲に生くるうれしさを實際に教うるかのように、

禮拜堂からは學友の朝座の聲が尊かつた。

袈沙斬りの石碑

私は小さい頃、天の橋立を眞正面に見る岡の上の寺に育つた。今は、日本三景の一といつても國立公園に壓倒せられてばつとしないが、見物に出かけると縞の財布が空になると歌はれる程遊客を集めた。その丁度中間頃に、今ではどのようなになっているか知らぬが、小さな竹垣に囲まれた石の墓がある。所が、まるで一刀の下に袈沙斬りしたように上半分が、傍に轉つて置いてある。

口碑によれば岩見重太郎が親の仇を打つ前日、自己の決心の程と刀の切れ味を試すために、父の墓に詣でて、この袈沙斬をやつたのだという。史實としてもおかしく、又、この口碑自體が大變辻妻のあはぬ事で、こんな亂暴すれば、親の墓を切るの無禮だけでも刀は曲り、大切な試合に不覺をとる。しかし、子供心に、そうかしらと思つて見ていた其時には、別に説明の建札もなく附近一帯に口碑として傳へられるだけで残つてゐる傳説であつた。

一寸した石の存在であるが、長年の風雪にも變らぬ石というものの存在は、長く——おそろくこの長くという字の意味する最大限長く——人々に、その存在と、その意義を誇示するものの最たる一つではないかという事をつくづく思ふ。

有史時代の曙光は、まず石器によるものである。阿育王の石柱、石崖文は今日貴重な文献である。千古に渡る文化の保存、傳道という事を、明日に追われて、うつかりしてゐる此頃ではなからうか。(R)

會員のページ

◎謹啓梅雨之候貴會愈々御隆昌にて教化事業に御精進の條教界の爲欣快に存じますさて先日ラジオ放送にて眞野先生の「大乘の歩み」を拜聴いたし感激いたしましたそして單行本にして出るだろうと待望いたして居ました處本日中外日報誌上にて貴會御發刊の淨土誌上に拜見いたしましたので早速御注文いたしました私は眞野先生を平素より畏敬崇拜して佛教思潮等に御講話を拜見いたして居ります者です貴誌にはいつも御講話が拜見出來ますなら續いて愛讀いたし度いと存じますそれに吉田絃二郎先生の「京の時雨」もある由願はくば吉田さんの「京の時雨」を最初から讀み度いのです前號から書かれてあるものでしたら(1)も讀ませて下さい御送本次第御送金いたします兎に角只今切手代用にて金三十圓誠に勝手ながら御送金いたします故「淨土眞野先生の大乗の歩み」を至急御送誌御願いたしますそれから貴社の口座番號を御一報御願いたします右御願迄早々(石川縣松波町 中谷秀學)

◎私は貴會の淨土に御執筆の老詩人吉田先生にお親しい間柄の毎日新聞社の山崎副部長のご好意で、時折り淨土を送つていただいて心の糧としている病床生活四年越しの心臓病患者ですが……

りの慰安でございませう。毎月御送り頂いてまことに、ありがたうございませう、厚く御禮申し上げます。諸先生はじめ皆様御體御大切に遊ばします様お祈り申し上げます、御きげんよう

南無阿彌陀佛

(千葉縣柏町豐四季 矢野ふみ)

◎「淨土」の送本毎月々 有難う御ございませう、一番に「吉田先生」の御著拜見しそれから次々と拜讀反省何かを得さして頂いて豊かなる心構への恵みを感じて居ります。今少し頁數が望ましく思はれますが、就きまして「維持會員」申込みさして頂きたく願ひ申し上げます。

次便に振替用紙はさみ下さらば仕合せで御度います。

す、さて現在續仰會なる物有るか否か存じませんが終戦前迄法然上人續仰會より月刊雜誌淨土發行され居り終戦後如何相成り居ります哉、萩市立病院(主に結核病者)の小生運営委員にて養老院や母子寮へは時々布教慰問に参ります病棟五十床有る結核患者にはこの淨土の様な本を毎月或は時折慰問布教の反りに贈りたいと思ひます故それに相應しい刊行物の見本(古い物でも結構)至急お送り願ひます、適當な物有らば至急部數と誌代お送りして注文致します故何分の御回答煩はしたく願ひます。(山口縣萩市津田町 難波俊道)

○信仰の集い

誰にも讀めるお經のけいこ
誰にも解る佛教のはなし

指導 大正大學教授 佐藤賢順氏
時 九月中毎日曜日 午前九時
より十時まで

品川區南品川四丁目

所 願 行 寺

(京濱急行南馬場下車二分)

「淨土」會員は奮つて參加して下さい

吉田絃二郎作

戯曲 京の時雨 (4)

前號まで……京洛を荒し廻つた盜賊耳四郎は、今は教阿彌と名づけられ法然上人の門下に連つて、念佛行に明け暮れしている。とは云うものゝ、彼には過去に負うた恩愛の情が長く尾を引いている、彼の家に置いた妻阿萬を昔から狂わしく戀う津の三郎がいて、阿萬を尋ねていく度に、四郎に指をかみきられつゝも衰弱の身體をひきづつて亡靈の如く阿萬に纏いつくのであつた。教阿はそういう事も忘れたはずではあつたが、行脚先の宿場で、三郎が阿萬らしい女と歩いていたらと聞くと、一散に馬を飛ばせて馳せ返つて來てしまつた。……

第八場

嵯峨の教阿彌が棲家

「S.E.

靜かに遠く琴の音に交つて笛が聞える。虫の音」

阿萬 昨夜、あなたが馬でかけつけて來なすつた時の、すごい顔つたらありませんでしたよ。

教阿彌 おれはなんにも覺へてゐない。無我夢中だつた。三郎奴を追つかけたが、途中であの男に逢はなくて仕合はせだつた逢はうものならまた恐ろしい罪業を重ねるところであつた。

阿萬 あなた、もうおやすみなさい。

教阿彌 やすませもらはうか。どれ（と寐る）なまいだ、なまいだ々々々々、あゝ靜かな夜だなあ。

阿萬 嵯峨野の奥ですからねえ。身も心も澄みわたるやうでございます。

(間)

教阿彌 琴の音が聞えるではないか？

阿萬 笛の音も聞えます。

教阿彌 どこで弾いてゐるのだらう？

阿 萬 ああ竹藪の奥にこのごろ、都から引つ越して來られた方があるのですよ。

教阿彌 うむ。

阿 萬 七年前の源氏平家の戦さに白川邊のお邸を焼かれたすつたさうで、戦さには、こりていらつしやるのです。飛鳥の左中將さまとか申す方のお姫さまと若様ですよ。また源氏が都に攻め寄するなどといつてさわいであるので、嵯峨へおいでになつたらしいのです。それで時々、御きようだいであゝやつて。

教阿彌 阿萬（と半身を起し）人の聲音はしなかつたか？

阿 萬 いゝえ。

「S.E. 風の音」

教阿彌 阿萬、誰れかこゝへ歩いて來るやうだが？

阿 萬 この夜更けに、誰れが嵯峨の奥までたづねて見えるものですか。

教阿彌 いや歩いてゐる。

阿 萬 妻戀ふ嵯峨野の鹿でもありません。

教阿彌 妻戀ふ鹿の足音か、なまいだ、なまいだ。

(間)

「S.E. 時雨の音」

教阿彌 誰れか人が近づいて來る。

阿 萬 また時雨が降つて來たのでせう。

教阿彌 いやたしかに人の聲音だ。幽霊のやうに歩いてゐる。

阿 萬 幽霊のやうですつて、あッ氣味の悪い。

(間)

「S.E. 風の音」

三 郎 (戸の外にて) 阿萬……阿萬。

阿 萬 あたしの名は呼ぶのは誰れです？ (顫へつゝ)

三 郎 三郎だ、津の三郎だ。

阿 萬 三郎さんですか？ どうぞそのまゝ歸つて下さい。

三 郎 この戸を開けて、たゞ一度でいゝから、お前の美しい顔を見せてくれ。

教阿彌 三郎、おとなしく歸つてくれ。でないとおれはお前の十本の指を叩き切つてしまふぞ。

三 郎 指一本残つてゐたところで、何にならう。わしは命があるかぎりには阿萬のところへ來る。

教阿彌 おれはお前の命を買ふかも知れぬぞ。

三 郎 おれも阿萬の目の前でお前に命を取つてもらはう。

教阿彌 早くもどつてくれ。おれは昔の耳四郎になりたくないのだ。おれにこの上の罪業を重ねさせてくれるな。

阿 萬 三郎さん、早くどこかへ行つて下さい。あたしを助けると思つて。あたしのことは、ふつつりと忘れて下さい。

三 郎 阿萬、わしは辛つとこゝを探しあてたのだ。わしはひどく

疲れてゐる、こゝの戸をあけてくれ、あけなければ、わたしは戸を破るぞ。

教阿彌 破るなら破つて見ろ。

三郎 おう、破るとも（戸に、からだを打ちつける音）

阿萬 いけません。

三郎 阿萬、あけてくれ。

阿萬 いけません。

三郎 えゝい（と無理にからだを打ちつけて戸を倒して内に入る）

阿萬 あれッ！

教阿彌 こいつ戸を破つたな、どうするか見ろ。（三郎の袷髪をつか

み戸外へ引きずり）戸外へ出る。

阿萬 あなたそんな手荒いことをなさらないで、可哀想です。

教阿彌 可哀想といつたな。

阿萬 三郎さんが可哀想です。

教阿彌 三郎が可哀想といつたな。お前は

阿萬 はい。

教阿彌 でもおれは約束通りのことをしてゐるのだ。今夜は最後の

指を切つてやるだけのことだ。

三郎 さあ、おれの指を切れ。

阿萬 その指を切つてはいけません。その指を切つたら、あなたはあ

たしはあたしの心まで切り放すことになりませう。

教阿彌 何だと？

阿萬 あなたが三郎さんの指をお切りになるたんびに、あたしの

心は三郎さんに惹かれてゆくのでした。

教阿彌 おれが三郎の指を叩き切ることにお前の心は三郎奴に。

阿萬 はい（と泣く）切られた指の一本一本があたしの心を、あ

の人の方へ引きずつてゆくのでした。

三郎 フッフッフ……（無氣味な笑ひ聲）耳四郎、阿萬はいよい

よおれのものだ、早くこの指を切れ、切らないか。

阿萬 あなた切つてはいけません。

三郎 耳四郎、お前は阿萬をおれに取られるのが恐さに、この指

が切れないのか。

教阿彌 お前の指一本切らいで何うするものか。かうなればまゝよ

お前の指一本はおろか、お前の命までももらつたぞ、さあ

河原へ来い。

三郎 おう行かいでか。

阿萬 行つてはいけません。

教阿彌 阿萬、邪魔するな。三郎、さあ来い。

三郎 おう行くと（と歩きかけてよろめく）

阿萬 あゝあぶない。

教阿彌 早く歩け（と無理に三郎を引つ立てゆく）

阿萬 あんまりです。歩くことさえできないほど弱つてゐる人

を。あんまりです。（と泣きつゝ兩人の後を追ふ）

時雨の音、鐘の音、にて暮。

（おわり）

芝園だより

◎ ハリつめてゐる糸は一寸たる

んでもすぐ分るが、時の流れに乗つてすぐ生活には、時にたるんでもその時は氣のつかぬことがある。ところが、それが後になると倍にも三倍にもなつて響いて來るものである。油斷大敵とはよくいつたもので、六、七、八と三ヶ月の本誌には若干それがいえることは、誰にいわれずとも、切實に感じ、自ら驚きを深くしている次第である。

◎ そのゆるみにも、たどり求めれば相當の原因はあるのだが、その一々は己れの胸にたたんで、新秋緊縮を御約束しておく。

◎ 新秋はものの實る時、とはいへこれは少し早きにズレて夏のころであつたが、實りは龍海氏に訪れ、第二世の生誕を見たことは、

何としても眞野家にとつて、且つ私共同人にとつても、同慶の至極とて、喜びをお分け致します。

◎ 正大の動搖も、推尾先生の御出馬を得てどうやら倍舊の態勢を得た。

◎ 本年の宗教大會は十月二十五日二十六日、宗務所で開かれ、共同研究題目は念佛論、其他一般研究發表が行われ、全國好學の徒の參集が期待されている。

◎ 各地各人の動靜は、大きくは佛教界の動向をも示すものとして注目されるものである。出來る限り、近況、寸評をお寄せ下さるよう。誌上に掲げて、皆様の健闘をお傳えしたいと考えております。

◎ かつて本誌編集に盡力された鎌倉の吉田宣成氏、郷に歸りて一家をなし、ついで一女を挙げられ次いで本年は大船中學に奉職とのこと。淨土の發展と共に益々氏の發展を祈る。(竹中)

◎ 京の時雨は本誌を以て終結する、盡きざる興趣と、意味深い示唆を我々に投げかけると共に、立體的な法然上人傳へのあり方についてでも考えさせられる點が多かつ

た。又、來號より吉田先生の隨筆を掲載します。此間、輕井澤へ避暑に行かれる前にお伺いした所、

法然上人のものは、なか／＼難かしいと迷懷しておられた。今年が淺間の煙の見納めですかねとつぶやかれたが、先生と對していると佛教的な無常感、諦觀、謙虛なる法悦といったものが受取られるようだ。我々會員一同は、先生の御健康を祈りつゝ、次々の玉文を期待しよう。

◎ 久しぶりに本誌は會員のベージを設けました、會員の消息、會支部の模様等お知らせ下さい。なるべくば、原稿用紙にて。

◎ 最新最進の教育と稱する六三制は、範をアメリカの理想論にとつて、やり出したものの、「話の泉」式の教育で、學力必しも伴わず、學習と山積する教科書群と取組んで、尙且、夏休みも補習して徒らにくたびれている。むしろ、

此をボイコットして舊教育でやる私立の方が成績がよいのは、皮肉

だ。本會會員の二―三割は此方面の關係であらうし、又、寺院教化の線では大多數がそうである。取るべきは取るべし、捨てるべきは捨てるべしだ。

◎ 曉の芝公園、覺醒を告げる増上寺の鐘が鳴り渡ると間もなく、多數の木魚の音が高らかに風に送られてくる。念佛會の一時。賢順先生の自坊でも目下夏期念佛會が毎朝行われている。

◎ 信徒必携は發刊以來非常に評判よく、「便利なものが出來た、今までなぜこういうものがなかつたのか」という聲がしきりである。檀家は、まず信徒でなくてはならぬ。各檀家佛壇にこの一本を備へ、正しい信仰のあり方へ進みたい。

◎ 其他トラクトもので、再版、新刊の企劃が進んでおります。

◎ お彼岸には、シリーズ「お彼岸」を御利用下さい。

◎ 少つと途切れた例月訪問は、來月は、心理學者宮城普彌氏です。

○好評絶讃・待望の書出づ
○之だけは知っておきたい信徒の常識
○施本、講話テキストに最適

浄土編集部編

浄土
トラクト

信徒必携

B六、十六頁
價十圓送八圓

○目次——一、ほとけさま（阿彌陀佛・觀音勢至・極樂淨土）二、みおしえ（法然上人・三部經・念佛・往生）三、おつとめ（佛壇・珠數・木魚・けさ・法衣・合掌禮拜・十念・燒香・墓參）信徒のことば
●五十部以上一割引、百部以上二割引

法然上人鑽仰會



協和銀行

支店・全國主要都市に二百三十餘ヶ店

本店・東京港區芝大門

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十七年八月廿五日印刷 昭和二十七年九月一日發行

第十八卷

第九號

F・F・D 幻燈機

○映寫機（ふつう映寫機と同じ性能）

ミナシキ……一三八八〇圓 送五〇〇圓
マスター……一三五〇〇圓 送五〇〇圓

○スライド（フィルム）

各卷三、四〇〇圓程度、數百種カタログ進呈、

○本會代理責任取次

維持會員芳名（敬稱略）

川波源四郎（茨城）
山田鏡瑞（東京）
三味院（兵庫）
内田信宏（松江）
誌上厚く御禮申し上げます。

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓（〒共）。毎號定價三十圓〒四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和廿七年八月廿五日印刷
昭和廿七年九月一日發行

（定價三十圓）

編輯兼 眞野正順
發行人 眞野正順
印刷所 共立社印刷所
發行所 法然上人鑽仰會
東京港區芝大門五ノ二〇
電話 東京八二一八七番
電・芝（四三）一三二八

定價金三拾圓（送料別）

寄贈・釧路・大成寺